

常樂我淨

経典の中に「常樂我淨」という言葉があります。お釈迦さまが出家されたとき、人間の多くはこの世は無常なのに常と見ており。苦に満ちて、いるのに樂と考へ、人間本来は無我であるのに我があると考へ、不淨なものを淨らかであると考へて、いると思われました。

人間はどうも仏教の教えとは逆な見方をするようあります。そのようなことから、この常樂我淨を四顛倒(逆さまな見方)とも言います。仏教の基本的なものの考え方は、この世は無常であり、一切皆苦であり、諸行無常であるということになります。「常」というのはいつも変わらずにいたいと思う心です。いつまでも健康でありたい、若くありたい、長生きしたいと思うことです。「樂」というのは、楽しく、快適なことで、不都合な事は嫌う心です。

快樂ばかりを追い求め、快樂の達成が人生の目的になつて、いるような人もおりますね。

「我」というのは私をいつも中心におくことです。「私が、オレが、自分こそが」と、自己主張が強く、他人から疎遠にされると腹が立ち、怒り狂うような人です。「淨」というのは自分や、自分の周りはいつも淨らかで間違いがなく正しいと思う心です。

この四つを満たすと血眼になつて動き続けているのが私達の姿のようでもありますね。

仏教では生老病死を四苦と言いますが、「常樂我常」が満たされないからこそ苦しみなのです。

私達はこれらのこと、すべてをかけて生涯かけて求めて、いるのかもしれません。

幼い頃よりこの常樂我常を満たすと必死です。努力も知恵も必要です。これは、何でも

「自分の思い通り」にしようとする生き方です。しかし世の中はそのようには動きません。

いや世の中ばかりの事ではなく、自分自身の肉体も、精神も衰え、老い、病み、やがては自分

の思いとは逆に死を迎えるかもしれません。この悩みは自分の【いのち】を自分勝手に出来ると思う心が作り出しているようです。いのちの所有化を考えているのでしょうか。

自分のいのちは自分のもの、自分の力でどうにでもなると思つて、いるのでしょうか。

人間は、えらくなりすぎたのかもせんね。自分がいのちを造つたかのようですね。事実はいのちの私が先にあり、私の思いは後のはずです。しかし私達は自分の思いを先にしていのちを後にします。自分のいのちなら自分勝手にできるはずです。自分のいのちではなく「いのちの私」ということが眞実でないでしょうか。いのちの私と、いうことが、仏教の縁起の世界の見方です。私達は誕生も、生きていることも、死さえも、自分の思いを超えて、います。

自己の営みも、出会いも、思いを超えて、います。その思いを超えた世界を「不可思議」と言います。私の分別、勝手な都合の良い思いを打ち砕きます。

この世界を知つてこそ、私の本当の姿があぶり出されるのです。大きないのちの働きの中で【いのちの私】を知らされるのです。明日をも知れぬ、いのちの私が、限りあるいのちが、限りない、いのちにつつまれて、今生かされていることを聞くのを聴聞と申します。

今、人間はクローンを造つたり、代理出産、卵子提供、産み分けなど【いのち】を操作するようになりました。しかしどんな時代が来ようとも【私のいのち】ではなく【いのちの私】を見つめることができます。しかし、大切な思えます。